

杉田暉道

古来日本人は、死後、靈魂が屍骸から分離すると考え
ており、これは日本民族に固有のものであった。古代の
神道は、死者の靈魂を死靈と呼び死穢を持ってゐる。し
かし子孫がこの死靈を丁寧祭ると、死靈はしだいに死
穢がとれて浄化される。そして死後三三年から五〇年を
経過すると、死靈は完全に浄化されて祖靈となり、これ
がさらに昇華されると山上にのぼり、祖先神すなわち氏
神となる。仏教の三三回忌は神道の死靈が祖靈になるま
でに三三年から五〇年かかるといふ思想を応用したので
ある。

一方、新たに日本に伝来した仏教は、靈魂の存在を討
議の対象としなかつた。仏教思想がいう「我」というこ
とも、人間の全体像の外に特別に「我」といふものがあ

るのではない、というのである。したがって、浄土に往
生する場合でも、我とか靈的な存在とかいうもの
が、往生すると考えなかつた。往生の主体は、あくまで
も心身の統一体としての人間存在そのものなのであつ
て、とくに心的なものとか靈的なものを抽出することを
拒否した。この身心一元論が、一五世紀の世阿弥セアミの段階
にいたつてひとつのピークに達した。かくして心の内面
的な追求が、そのまま身体運動の完成を生み出す重要な
契機になると考えられるようになり、茶の湯チヤウや活け花、
武道、相撲、さらに近代の各種スポーツにいたるまで、
幅広い分野で身心一如とか心技体ということが説かれる
ようになった。

また日本に伝来した仏教はすでに中国において儒教の
祖先崇拜の儀礼を取り込んでいた。これは日本古来の祖
先崇拜の習俗とうまく合致し、仏教が日本に広まる大き
な要因となつた。儒教は一、祖先崇拜 二、親への敬愛
三、子孫の存在を孝としてその基本思想とした。したが
つて、孝の行いは自己の生命が永遠であるということ
可能にしてくれると考えられ、その結果、死の恐怖や不

安が解消できるとした。かくして現世に再生できるのであれば、その時は身体が完全な状態で再生したいということも誰もが願う。したがって死ぬ場合は身体の完全な状態でいたいということになる。これがドナが少ない一つの理由である。しかし、親が子のために生体臓器移植をすることは納得する。それは子どもが病気が回復して健康になり結婚すれば、丈夫な子どもを生んでくれると考えるからである。

さて日本人はこれまで述べてきたように、二つの死生観を持っている。すなわち死亡すると、靈魂と肉体は分離するという霊肉二元論と、死亡しても靈魂と肉体は分離しない、一体であるという霊肉一元論の死生観である。このようにわれわれの考えの中に、互いに矛盾する死生観が心の奥に存在することが脳死や臓器移植の問題を複雑にしていると思われる。さらにキリスト教と仏教の「心臓観」の違いをあげねばならない。それはキリスト教の「聖心観」は神（キリスト）と人間のあいだの「心臓の交換が課題とされているのに対し、仏教の「心臓観」では、仏（大日如来）と人間のあいだの「霊肉の合体」が

最終的な法悦とされているのである。すなわち神秘体験における「交換の法悦」と「合体の法悦」の違いということができる。かくして心臓交換の幻想は、今日の臓器移植の実行のための身体観が存在するといえるが霊肉合体の幻想は、臓器摘出への道を堅く閉ざしているといえよう。

さいごに死者を人権的によりのように考えるかについて述べたい。今日までの自然科学の発達状態をみると、人間社会は自然と上手に対峙していた。しかし頭脳社会になると、肉体労働は重要視されなくなり、身体の価値も軽視されるにいたった。かくして死者の死体は物体と考えられ人間として扱われなくなった。これに気付いた多くの国民の中に、脳死患者を死者とみなした場合や、脳死患者から臓器を摘出する場合、なにをされるかわからないという恐れを持っている者が多い。

(神奈川県予防医学協会)